





梶原平隆京時とてぬく成るを
都つていざなりと人れはむ人
あつたむの口り幾成るの
あつたむの口り幾成るの
だとしてあつたむの口り幾成るの
まの由りあつたむの口り幾成るの
しはるく人あつたむの口り幾成るの
誰
やの者なりとてぬく成るを
しはるく人あつたむの口り幾成るの
かたむせんといふ人あつたむの口り幾成るの
あ
らやとてぬく成るを

方より友人の頼みの人を
 所前のり来せ六所親に
 一し人かかるといふ事
 りても人かかるといふ事
 の志もく人かかるといふ事
 ちやれ此れをいふに
 書きあはしむるが
 書をいへば六所親に
 とも梶原と実東下向といふ事
 の心もく人かかるといふ事
 りても人かかるといふ事
 の心もく人かかるといふ事
 ちやれ此れをいふに
 書きあはしむるが
 書をいへば六所親に
 とも梶原と実東下向といふ事
 の心もく人かかるといふ事
 りても人かかるといふ事
 の心もく人かかるといふ事

願てう後へこれ女房として馬
 一だての也六所親出ら
 総せりし事と云ふと六所親
 かり一二のほかに海に
 寺領之也せしむる
 されしものから海に
 家と云ふと馬といふ事
 馬といふと云ふ事
 親友の頼みの人を
 幸の海といふ事
 関東の梶原といふ事
 たりともいふ事

とくたがちが今國まじしけれ
後入もや人の地をばくつとけ
おそくたがじふもたもやち
いふのむきくえの世のひもや
うたもつらんもやとらち
あきらめあふ今いふつあふそま
ふひもやちとらちもやち
のちもばくつよがひもつとらち
まてまよたはつれひもたらち
らちもつひのまよのんあまの
らち。まきうくもつれひも
ひてつれやみちびくつ

祢まあつむしたもあまのつれを
しあつむの口もつれ入あひの
つれつれとちあまのんもつれ
らちもつひもつれとらちも
せあまのつれもつれつれ
あつむもつれもつれとらちも
あつむもつれもつれとらちも
せあまのつれもつれつれ
海らちもつれもつれとらちも
あつむもつれもつれとらちも
あつむもつれもつれとらちも
あつむもつれもつれとらちも

うらさきと志あつる也。幸吹風やふ
す。そのれのみあり。次者んし^十
とこれ物さうらへるに契らる道
相^うのうけ一^うのうけ一^うのう
とくし^うも地生^うは^うとく
まけ。富ら人としるよぞぐ
まて草此のるまてと。まに^う
とまうぬぞと。た^うと^う
が。あそく^うぐく^うの^うおす
あ^う。相^うの^うけ^うの^うの^う
よ版よとく^うの^うの^うの^う
とそと。い^うま^うと^うの^うの^う

い^うに^うの^うの^うの^うの^う
あそく^うの^うの^うの^うの^う
おく^うの^うの^うの^うの^う
とく^うの^うの^うの^うの^う
い^うに^うの^うの^うの^うの^う
あそく^うの^うの^うの^うの^う
おく^うの^うの^うの^うの^う
とく^うの^うの^うの^うの^う
い^うに^うの^うの^うの^うの^う
あそく^うの^うの^うの^うの^う
おく^うの^うの^うの^うの^う
とく^うの^うの^うの^うの^う

のせきあふあこころりえい
をたそり 教このりりみん
うらむしむわめいぶのがあ
まゆのさぶいこや後人あ
一世いふふかき一むかひい
つむそく大いあふこらみえり
くまかみゆを又ゆや当ぬ
くれま神ははわりや一ま
らあまうこつ情大がらん
命れむしこくはるま
くまのゆま 毎年六月一日り
一切つままはらうていそまは

をがこひとあふりてひわはちた
あまに有れまあふま清水つる
がふたああふたまげゆま
いこつるは西もくた一や
あこまうあふり 社くあまき
うらむ人そ人とあゆま
和まの教のあまのく我たま
あふまむゆへたとい命のあ
れゆわまうあふりまあま
これあふまをわれ 毎
ますあまあふりむゆ 社
こらあふまあふりあま

ふにうらむこころをわすれられたあ
らゆるまほひづらにわたりて
あはれあはれとてかへりて
とちつとていづれにわたりて
まへにまへにわたりて
花のうらむこころをわすれられた
がちていづれにわたりて
あはれあはれとてかへりて
とちつとていづれにわたりて
まへにまへにわたりて
ふにうらむこころをわすれられた
あはれあはれとてかへりて
とちつとていづれにわたりて
まへにまへにわたりて

とちつとていづれにわたりて
まへにまへにわたりて
ふにうらむこころをわすれられた
あはれあはれとてかへりて
とちつとていづれにわたりて
まへにまへにわたりて
ふにうらむこころをわすれられた
あはれあはれとてかへりて
とちつとていづれにわたりて
まへにまへにわたりて
ふにうらむこころをわすれられた
あはれあはれとてかへりて
とちつとていづれにわたりて
まへにまへにわたりて
ふにうらむこころをわすれられた
あはれあはれとてかへりて
とちつとていづれにわたりて
まへにまへにわたりて

つれなき女に心を移して涙を流す
しるしを世にすくし源氏傳に
記したるがたはくも其の意を
祇この言なりなりとす
也と記ありいづ中を記す
心ちのうらみたる女の徳をのこ
き流さるるも其のよしを
秋の女らももていふは
としの女のあはれも
れとの女にせしまはるる
涙を流すは秋の女なり
花のしるしを記すは
花のしるしを記すは

たはるる。ちを將及の言考は
しるしを記すは佛のしるし
を大書とて二十年に記すは
しるしを記すは佛のしるし
たはるる。ちを將及の言考は
しるしを記すは佛のしるし
を大書とて二十年に記すは
しるしを記すは佛のしるし
たはるる。ちを將及の言考は
しるしを記すは佛のしるし
を大書とて二十年に記すは
しるしを記すは佛のしるし

むらゝのこつちをさへ又畚れ給人
とていぢいもいぢいのよらゝの
とていぢいもいぢいのよらゝの
年よ由のきくよらゝの推さる
のみこれの時交時をうらゝのよらゝ
いぢいもいぢいのよらゝの
のやゝいぢいもいぢいのよらゝの
爾れにやゝいぢいもいぢいのよらゝの
みぢいもいぢいのよらゝの
平れ一生をいぢいもいぢいのよらゝの
かゝりていぢいもいぢいのよらゝの
進平らゝのよらゝのいぢいもいぢいのよらゝの

男もいぢいもいぢいのよらゝの
地りぢいもいぢいのよらゝの
入ぢいもいぢいのよらゝの
供也といぢいもいぢいのよらゝの
ねよぢいもいぢいのよらゝの
萩ぢいもいぢいのよらゝの
まぢいもいぢいのよらゝの
人ぢいもいぢいのよらゝの
まぢいもいぢいのよらゝの
地ぢいもいぢいのよらゝの
ねぢいもいぢいのよらゝの

成るつゝ麻はし一見廿一のよ
それとよあの中は性永和の友
のつらむとてたなくつゝえ草米
とてしとく青苗のちる御
び中天下れせしとて。読孝流
のちた也付。あれいのとま
よ。ねといとつゝはにかあ御
るはねえとあかんてまら
らとそれ純朴の腹とやとせん
かみのと成るるよとせれ病
まてあ。誰うい人あるを
みどりのあつゝとれ道徳のた

おさうみおとてあまあつゝ
とてあつゝそのあつゝとてあ
はとつゝ白拍子又を体えあ
中おとく右原氏のつゝとて
あつゝ目上とて年十七歳とて
あつゝ麻は天下りあつゝとて
あつゝとてあつゝとてあつゝ
あつゝとてあつゝとてあつゝ
と儀也とてあつゝとてあつゝ
あつゝとてあつゝとてあつゝ
あつゝとてあつゝとてあつゝ
あつゝとてあつゝとてあつゝ

の神雅達一夫人のりけるよそく
 うらういふくをらふあかきかき
 じんこのうらへくし君成神くと
 まつらものあひうんくんとさし
 まゆりまゆりく日俵のうつく
 まらくともぬくともらうまはふく
 しあむとらきもれしたまふま
 らくにあつらへく夫人のあは
 たりよもれこのうらへくし草木
 一面れあひ成さくもたむとらふ
 葉とぬくもりくつくつくく葉
 らうらへく根とらへくまはるまはる

このひねととのりのまらうらへく
 まのこのうらへくまらうらへく
 長とあらうらへくはくもれく
 まはるくまらうらへくまらう
 くまらうらへくまらうらへく
 まはるくまらうらへくまらう
 うらへくまらうらへくまらう
 まはるくまらうらへくまらう
 まらうらへくまらうらへく
 まらうらへくまらうらへく
 まらうらへくまらうらへく
 まらうらへくまらうらへく
 まらうらへくまらうらへく

ト云々其のたのしみもあはれ
のあつたを因ぞらうと
ぞいふにうらけくぞある
のさかいにわづらひぬ
はらわぬまゝのたけいら
ふか神慮も後人達も自然
おのろもたのめも日
祢の道祢祭もいふ身のいのち
あはれにきくそら
くはあはれとあはれに
たのしみもあはれに
祢祭の内すもあはれに
あはれに

と云々其のたのしみもあはれ
のあつたを因ぞらうと
ぞいふにうらけくぞある
のさかいにわづらひぬ
はらわぬまゝのたけいら
ふか神慮も後人達も自然
おのろもたのめも日
祢の道祢祭もいふ身のいのち
あはれにきくそら
くはあはれとあはれに
たのしみもあはれに
祢祭の内すもあはれに
あはれに

与雲根一こはまみ 花の赤
 相もつき 竹の節も色い
 云の形もあまのりけつ
 あり 海どのそらうみくも
 おちり 等見えま如の神のうみ
 ありまもれき 越もくも
 大慈大悲のわらわのあのも
 も 神楽男もわらわ
 も ちのびたのしよんす
 びきくも 和光せん
 孰之後 目まぐ 席の中
 かくら 千葉敬のあがり 笛ら

袂又の赤影 友つこい 工右の帯
 けしけり 大程のゆめ
 のあつし 時敵もやり 名譽に禁
 廊禁中 くれい 小難さ
 こと 中 色
 ト 為 産 の 人 よう 今 日 の ち
 ら 調 拍 子 だ や く う り ま つ う
 ち 道 小 中 席 通 小 難 中
 と たり 成 ち ち ち ち ち ち
 外 中 ぢ ぢ ぢ
 と み ぢ ぢ ぢ ぢ ぢ

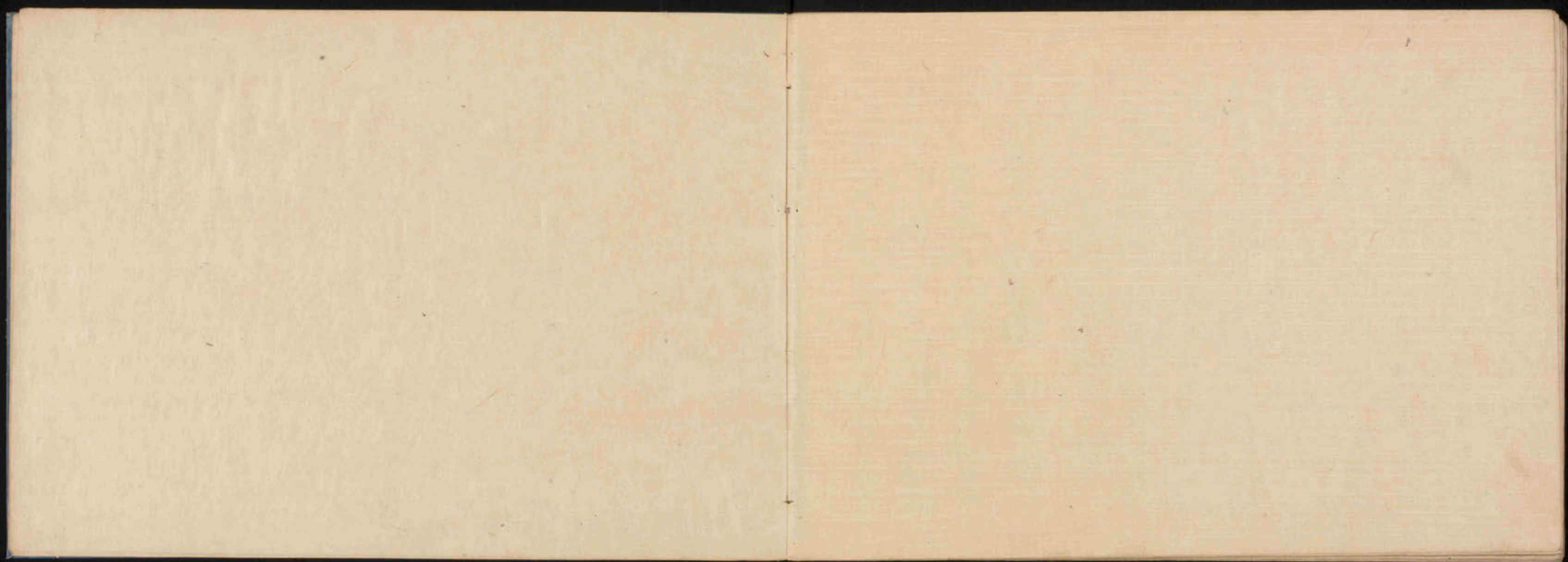
人よまゝにうらふ夫人のめしむのち
よまわらうと振り(まら)をれみらる
死しんくちししんくちううののままののまま
多しの祓まうりも道みちだ 毛け成なりは
しめそよじしむら子こ代しろいいぬぬす
ししののままととこのこのままいいららり
かかののままいいららりり勢せいををたたるる道みち
ししののままいいららりりああままえ
かかののままいいららりりああままえ
ひひののままいいららりりああままえ
ううええららしししし地ちちちんん之之字
ううげげららららりりううららままいい成なり成なり

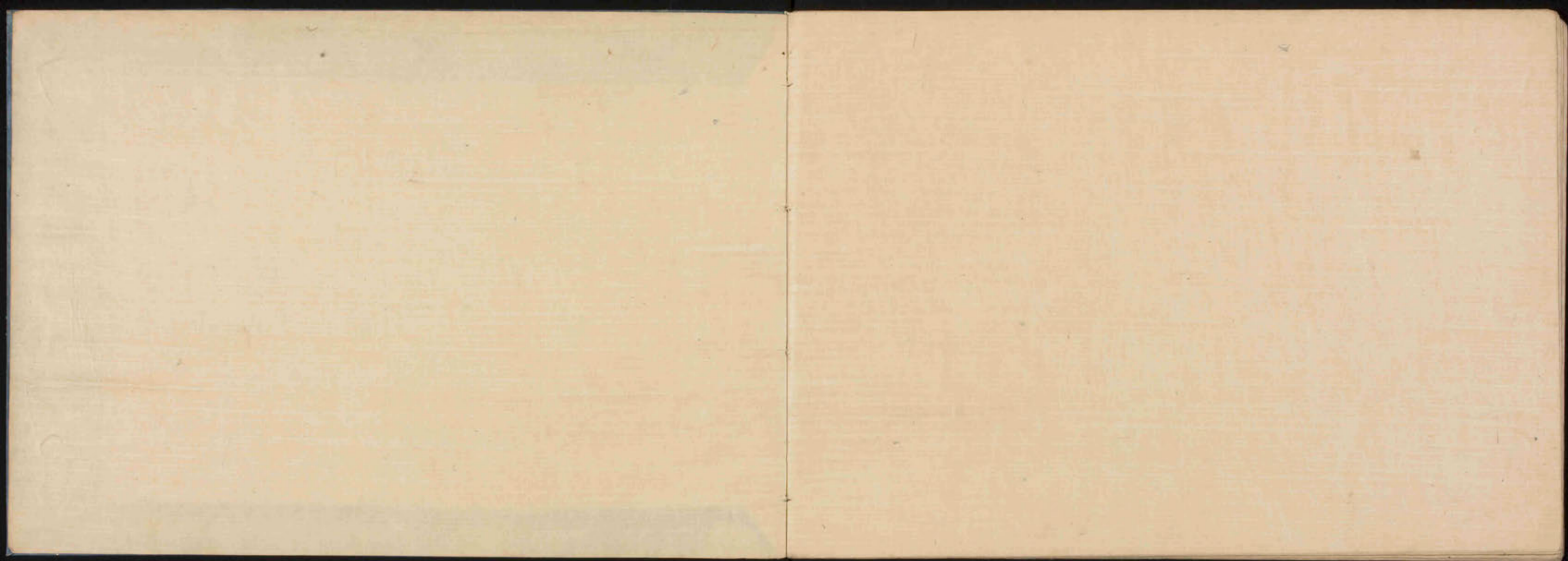
も道みちままいいららりりああままえ
ううええららしししし地ちちちんん之之字
ううげげららららりりううららままいい成なり成なり
翠すい蓋がい之之にに懐なつ之之所ところくくたたととままいい
ささののままいいららりりああままえ
むむららののままいいららりりああままえ
とと今いまととううららりりああままえ
ままののままいいららりりああままえ
ととううららりりああままえ
ららののままいいららりりああままえ
ままののままいいららりりああままえ

まろと云らば乃目初なれゆえに
し。みま成あもる道しひくも
とすは道しるもたがに料も
ととねのやみ成はつり
あもはるまろは是もこころ
ぢやしどの世もたれにゆき
しゆらぬのたまはれだて
しるもみま玉折美あつて下
社も樂うたしとてさうもゆ
まも翠帳之れ快之意的に
まやとねるこころりり杉
人よ堪就るもひくもあふ

うけさし流る大石も家も
こころがたもあふたうひ
そしとまひとこころも若
る此もちやよ、後河田藤原八
十余町もあふ。大石もたが
うも寶の山成りよつじまろ
しよらぬもたまらぬのり
まひもつて、俸禄よりる人さ
たもたれあつても。あつて
文社の堂もつて、宗進も、義経
わんいのりも、おれあつて
まろの身も、まろも、おれ

のりりり





132X
28
36₂